

インド・ラダック地方ストック谷周遊記

亀岡 岳志

(社会科)

kameoka.takeshi@musashi.ed.jp

Keywords: オアシス灌漑農業, 土地利用景観, 観光開発, 土地の占有, コモンズ

目次

はじめに

1. 旅の記録 ストック・カングリ登山記
2. 乾燥地域の生活とコモンズ
3. 開発に伴う地域の変化 商品作物の導入と土地の占有

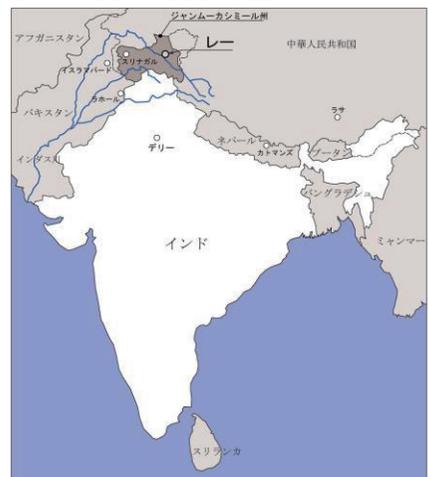
おわりに

写真・ストック谷景観絵図

はじめに

2015年にインドの北西部、ジャンムーカシミール州東部のラダック地方を旅して、この地の自然と人々の生活、そして山々に魅了された。広義のヒマラヤ山脈に含まれる地域であるが、アクセスが良く、また内陸でモンスーンの影響が少ないため、夏のトレッキングや登山が可能である。現地のエージェント（民泊の宿）¹で日本語が使えるのも気楽で、再訪して山に登ろうと決めた。2017年の8月上旬、ラダックのストック谷周辺に二週間ほど滞在し、あたりを歩き回り、6000m峰ストック・カングリにも登ることができた。本稿は、この登山の記録と、フィールドノートからの現地見聞録になる。

インドといっても、ラダック地方はチベット系のラダック人が暮らしている。中国チベット自治区を中心として広がるチベット文化圏の西部に当たる。ラダックの中心の町レーは標高 3400mあり（写真 1, 2）、南側にはインダス川が流れている。ストック



村はインダス川を挟んでレーの南にある（ストック谷景観図参照、以下景観図と略す）。

ラダックは中央アジア内陸部に位置し、ほぼ砂漠気候に属する。1970年代まで外国人に開放されていなかったため、チベット以上にチベットの文化を残し、「小チベット」とも呼ばれてきた。しかしかつての自給自足的な生活は、近代化と開発によって、急激に姿を変えつつある²。

しかし、砂漠気候や高所という自然条件は変わらず、人々の生活もそれらの自然、特に水という希少な資源の利用の方法と切り離しては成り立たない。

1. 旅の記録 ストック・カングリ登山日記

■8月2日

成田からデリー入り。国内線乗り継ぎでラダックの中心都市・レー（標高 3400m）へ降り立つ。タクシーでレーの町外れのゲストハウスに投宿。さっぱりした気持ち良い宿だ。

午後から雨になり、一休みするうちに、高度障害の症状が出てくる。意識して強い呼吸を繰り返すが、頭痛と吐き気がひどい。結局外出せずに、そのまま就寝。

■8月3日

一晚経っても体調は悪いが、とにかく動かなくてはいけない。今日はゴンパ（寺院）巡りの予定。町中でタクシーを雇い、上ラダック（インダス川の上流、南東方向）へ向かう。まず、サクティ村のタクトク・ゴンパで行われていたチャム（仮面舞踏）を見学に行く。高位僧、村人、観光客が回りをぐるりと囲んだ中庭で、次々と舞いが続いていく（写真3）。チベットに仏教を伝えたというグル・リンポチェの変化の合間に、道化が客席まで走り回って笑いを誘う。おばさんたちが、観客が何人であろうと分け隔て無く、チャイを注いで配ってくれる。とても楽しく、日本の村の神楽に雰囲気がとてもよく似ていると感じた。一方、舞の中に入って写真を撮ったりする一部の観光客への配慮のなさに驚く。その後、レー周辺で最大のヘミス・ゴンパへ参拝。多くのゴンパは、岩山の斜面に沿って聳える様につくられている。平屋根のレンガ・木造の多層建築は圧巻だが、高所順応ができていない状態では、上層階への登りがきつい。仏画、仏像は見事である。

レーの町、周辺の村を問わず、とにかく土木工事が多い。自動車道路と建物を造っている。労働者は、インド人（ビハール州）やネパール人がほとんどのようで、ラダッキ（ラダック人）はいない。インダス川が大増水している（堤防内より高水位で今にもあふれそう）ように見えるのだが、タクシー運転手は、「ノーマル」だという。

■8月4日

タクシーでインダス川を渡り、南岸の農村ストック村(3650m)へ移動する。一昨年もお世話になったニャムシャン(ストック村内の屋号、現地エージェント名)で、以後ホーム・ステイする(写真4)。民泊のイメージだ。ラダック人のワンボさんと日本人の池田さん御夫婦に、子どもが三人。賑やかである。

砂漠気候のラダック地方のほとんどの集落は、外来河川によるオアシスである。ストック村も例外ではなく、ストック川から取水された水路で灌漑される沖積面にのみ、家屋と耕地、林が立地している。周辺の山地や崖錐、水路より上側の平野には、ほぼ緑がない。

これから10日かけて、ストック村の南、ストック川の上流にあるストック・カングリ(6150m)への登頂を目指す。

■8月5日

高度順応のため、一人ストック・カングリ方面の道を辿り、トントン・ラ(峠)(4100m)へ至る。川沿い以外は基本的に砂漠でほこりっぽい道が続く。ただし、先の冬の積雪は15~20年に一度という多さで、今夏は残雪が豊富なため、通常は見られないという草原やお花畑が、乾燥した大地の所々に出現している。ブルーシープの群れに出くわす。岩塩が露出しているようで、さかんに地面をなめている(写真5)。トントン・ラにはトントン・ギャポという精霊が祀られた石積みがある。タルチョー(チベットの五色の祈祷旗)がはためき、ブルーシープの頭骨がたくさん集められている(写真6)。

わずかな頭痛があるが、高度順応はまらず。しかし宿に戻って、夜から歯痛がひどくなる。7月の仕事が終わってから、駆け込みで虫歯治療を開始したのが悪かった。感染症を起こして、患部が熱を持ってきたようだ。

■8月6日

朝、ぷっくり顔の左側が腫れる。当初は高所順応をかねて、今日明日の一泊二日で、ジンチェンールンバック(泊)ーストック・ラーストックの単独トレッキングを予定していたが、中止にする。ステイ先のワンボさんに車でレーの病院へ連れて行ってもらう。日曜日で休日診療だが、かなり人が多い。ラダック人の医者に処方箋を書いてもらい、薬局でantibioticと痛み止めを5日分購入。診察料は5 rps, 薬代も安かった。

■8月7日

ステイ先で一日療養。今晚は満月で、村の子どもたちが、チョルテン(仏塔)にペンキを塗り直している。ニャムシャンでは庭のアブラナの刈り取り直後のため、落ち穂狙いの

野鳥が代わる代わるやってくる（ヤツガシラ、カッコウ、ヒタキ類）。夜には大分腫れが引いて、なんとか登山の目処が立つ。

■8月8日

再び、高度順応のため、ストック・ラ方面を目指す。トントン・ラの手前からストック・ラへの道が分かれるが、峠（4900m）は遠く、結局 4400mくらいまで上げて引き返した。観光のハイシーズンで、たくさんのトレkker、登山者とすれ違う。「インド人」が多い。ラダッキは、はっきり「インド人」と呼んで、彼らと自分たちを区別する。2011年、ラダック地方における domestic tourist と foreign tourist の数が逆転したという。この国の経済発展の証だ。レーの町を見ても、かなりのお金流れ込んでいるのを強く感じる。レーの町や周辺の村でも、インド人の観光客、自営業者、労働者は多い。すれ違うインド人トレkkerに ” Welcome to India ! ” などと言われると、ちょっと違和感がある。

■8月9日

ニヤムシャンで、登山隊と ILP（インナーラインパーミット、入城許可証）取得をアレンジしてもらい、今日からストック・カングリ登山を開始する。ストック・カングリ（ストックの雪山）は、容易に登れる 6000m 峰として人気がある。ストック村ニヤムシャンの前から歩き出す。メンバーは、ガイド2人、コック1人、馬方1人、馬7頭（内、乳離れていない子馬1頭）、客はニヤムシャンで同宿のMさんと亀岡の2人、他に日帰りガイドで、ステイ先の主人であるワンボが付き合ってくれる。合計7人と7頭。

ガイドのロトスとジャンベル、コックのスタンジンは、ザンスカール（ラダックの南の山岳地帯）の人たちで、夏期を中心にチョグラムサル（レーの南東方向、インダス川近くの新興住宅地）で下宿して、現金収入を得る生活をしているという。馬方のプンツォクさんは、ストック村民、ニヤムシャンの向かいの家の人である。

同行のMさんは、出版社勤務で週刊誌担当のため、どうしても4日間しかとれないタイトなスケジュール。亀岡は5日間。彼と4日間のみ、コックと馬方をシェアする形で費用分担する。

この日はマンカルモ BC（4400m）まで移動。ここでヒゲワシの堂々たる飛翔を間近で見ると興奮（写真7）。この地の生態系の頂点に立つ環境指標生物だ。日本にはいない、きれいな鳥も多い（写真8）。双眼鏡をのぞいたり、周辺を歩き回ったりしている内に、テント設営が終了している。客（亀岡とMさん）はそれぞれ個人テントで、中にはすでにマットが敷かれ、シュラフが広げられている。食事は、食事用テントで取るが、ガイド、コック、馬方はここに泊まる。コックの作る食事は、手慣れていると美味しい。テント設営から食事準備

備まですべてやってもらえる大名旅行は初めての経験で、登山中落ち着かなかった。

ワンボは、明後日からカンヤツェ（マルカ谷のカングリ）のガイドイングのためにマンカルモ BC から下山。彼には道すがら、ストック谷のことを色々教えてもらった。感謝。

■8月10日

ストック・カングリ BC（4985m）へ移動。人もテントもゴミも多くて、びっくり。さすが人気の山とコースだ。マンカルモ BCの方が静かで良かった。

高所順応のため、ガイドと一緒にカングリ方面の道を尾根の上（5150m）まで登る。

マンカルモ BCあたりから上は、やや湿潤な感じになり、谷底を中心に草が増える。BCの近くでは、マーモットが子育てをされていて、近くを人が通ると警戒の姿勢を取っている（写真 10）。夜は微弱な頭痛。Mさんがガイド一人と一緒に夜 11 時からアタック。

■8月11日

ガイドのロトスとゴレップ・カングリ方面へ順応で上がる。きれいな条線土や亀甲土（周氷河地形の一種）を観察できた（写真 11）。雪の出てくる 5400m 周辺で、アイゼンを履いて、雪質と足捌きを確認する。

Mさんは、登頂に成功して、昼前に戻ってきた。彼は 30 代、山の経験は少なく、普段から特に運動をしているわけでもない。それでも根性で登った。山頂の下で苦しくて泣いてしまったそうだが、たいしたものである。

夕食後、仮眠。22:30 起床。日中は頭痛があったが、起きると体調が良くなっており、嬉しい。軽食を取り、ガイドのロトスと二人で、23:00 にアタック開始。

■8月12日

月が明るくて、ほぼヘッドランプは要らない。BC 北側の尾根を乗越し、トラバースを続ける。明瞭な道である。眼前にストック・カングリが聳える。モレーンを越えると、ようやく雪原状の氷河とその先の雪壁が見え、ルートは氷雪のセクションに入る。氷河は所々小さなクレバスがあるもの、リスクは感じない。先行トレースを参考にしながら進む。ロトスは体力抜群で早い、ルートファインディングはいまひとつだ。イライラするのは高度の影響だろうか。先行した韓国パーティーを抜いて今日の登山パーティーの先頭になる。カングリの南陵ショルダー（肩状の平坦部）を目指し、雪壁を登り出す。徐々に傾斜が増して、途中でアイゼン装着。5800m くらいまで好調だったが、5900m のショルダー以降は急激にペースダウンする。曇りがちで、気温が下がって小雪が舞い始める。南陵は岩と雪のミックスで、想像していたよりは難しい。我々はロープを使用しなかったが、後続パー

ティーは、ロープにつながり同時登攀（コンティニューアス・クライミング）で登ってくる。少々危なっかしい感じだ。一步一步足を上げて、5時過ぎに山頂到着。疲れた。展望はまずまず、山頂で日の出を見、7000m峰のヌンとクンや、マルカ谷のカングリであるカンヤツェを確認（写真12）。休憩15分で下山開始。高度の影響のせいか、集中力を欠いている。

アイゼンワークが必要な雪稜・雪壁を過ぎた後、グリセード（踵で雪面を滑る）を試みるが、力が残っていない。ガイドのロトスには先に行ってもらい、一人で休み休み下った。9時、ベースキャンプ着。Mさんやスタッフから祝福を受ける。

6000mを超える高度で、順応が十分でないまま、標高差1000m以上をワンデイ、というのは厳しい。

それでも、しばらく休んだら回復したので、Mさんらと一緒に予定より一日早く下山することにする。放牧地に散り散りになっている馬を集められるかがポイントだったが、馬方さんはさすがの手並みを発揮、あっというまに馬たちを引き連れてきた。11時カングリBCスタート、15時ストック村に着いた。途中、ストック・ラの下で、日本の旅行会社（西遊旅行）のツアー団体とすれ違い、立ち話をしていると、突然「亀岡先生！」と声をかけられ、驚く。武蔵山岳部OBのHK君（77期）が、ツアーコンをしていた。彼らはこれから登山なので、すれ違い。異国の町で一献傾けることができなかつたのはとても残念だ。

ニャムシャンに着き、登山隊は解散。ガイド、コック、馬方には別れ際にチップを渡す。池田さんによると、開放以後のヨーロッパの旅行者の流入と一緒に、チップの習慣も入り込んだとか。

■8月13日

午前中は休息。午後は、池田さんから、近場で面白いと聞いていた、ヤルツェという谷を遡行することにする。村はずれからすぐ西進～北上する。グーグルマップの地形図が役立つ。最初は村はずれの放棄された耕地を越えていく。日本ならば草ぼうぼう、になるはずだが、ラダックでは耕作放棄地はカラカラで、水路、畑、畑の中の灌漑用の畔まで形が明確、乾燥地域を実感する。ここからは道がないので、適当にヤルツェを上流に遡ると、徐々に水流が出てきて、堂々たる小川（形容矛盾か？）になる。植物の種類が増えて、ハチを始め昆虫が飛び交う。上流では、流れがまた枯れるので、中流部のみの楽園、レフュージア（生態的避難所）。砂漠の中のちょっと感動的な風景だ。ジオノ＝バックの『木を植えた男』を思い出した。イワシャコ（ライチョウに似たキジ科の鳥）が多い。3950mで引き返す。あと100m登って尾根に乗れば、ストック村の全景が見られそうだ。

■8月14日

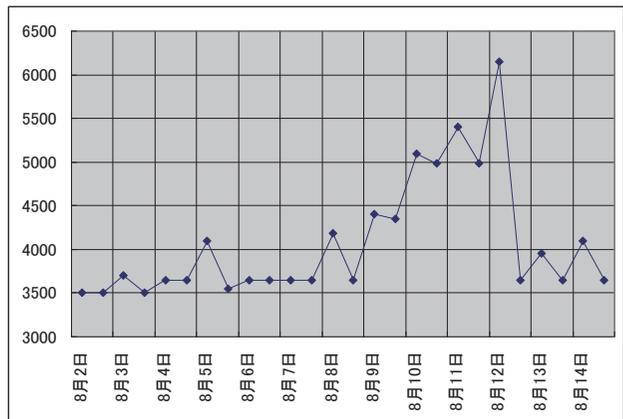
ニャムシャンでヤルツェの話をする、娘さん（Yちゃん9歳、四つの言語を話す）と池田さんが興味津々、彼らは冬に一度途中まで遡っただけで、水の流れも、ストック村の展望も得ていないという。3人で今日も行くことにする。といっても、宿は繁忙期で他にステイ客もいるため、昼過ぎにスタート。Yちゃんは地元の子だけあって、身のこなしが良く、登りが早い。小川の落ち込みを見て、<滝だ！>と喜んでくれる。谷沿いから尾根を目指して、緩いスラブ壁とガレ場の弱点を選びながら、4100mの主尾根に乗ると、向こう側にストック村の全景（写真18）、インダス川とその北岸の集落までの展望が広がる。3人とも大いに感動する。尾根上には朽ちたタルチョーがあった。人々の信仰の強さを感じる瞬間である。下りはガラガラの斜面を適当に下り、18時にニャムシャンに戻った。

■8月15日

長くお世話になったニャムシャンをあとに、レーからデリーへ。この日は、インドの独立記念日（1947年8月15日）で、様々な式典があるようだった。セキュリティーチェックが厳しく、搭乗手続きなどに時間がかかる。デリー（インディラ・ガンディー国際空港ターミナル3）のトランスファーで、デリー近郊の新興都市グルガオン（グルグラム）を見学。日本人も4000人いるという。まずキングダム・オブ・ドリームズ（ディズニーランド的なテーマパーク）に行く。その後で周辺を歩き回るが、タワーマンションがある一方で、遊んでいる土地も多く、そこではコブウシが草を食んでおり、インドだった。インドの新興都市を見るというポイントは、少し外した気がする。現代的な「地下鉄」で空港まで戻り、翌16日に帰国した。

■登山・トレッキングの覚え

右のグラフは、ラダック滞在中の日ごとの最高到達高度と宿泊高度をまとめたものである。3500mの順応に3日、5000mの順応には更に3日程度かかった。ダイヤモンド（高所順応を早める薬）は服用せず。



あちこちを一人で歩き回れたのは、電子地図の恩恵が大きい。Googlemap 以上に OpenTopoMap や OpenCycleMap は有効である。これは NASA の SRTM (シャトルレーダー地形探査機) データなどを使った地形図作成プロジェクトである。プレ・ダウンロードしておけば、かなり細密な等高線入り地図が、電波圏外でもスマホで利用できる。

2. 乾燥地域の生活とコモンズ

乾燥気候下のラダック地域では、水や森林などほとんどの資源は希少である。それが共有の場合は、様々な利用慣行が成立している。登山旅行中に見聞した断片を報告する。

2-1. ラダック農村のコモンズ（共有資源）～ストック村を事例に～

写真 16 は、ホーム・ステイ先の娘さん Y ちゃん（9 歳）が描いた夏休みの宿題の絵である。家族でインダス川の北側の谷を旅して、ホーム・ステイした思い出を題材にした。この地域の人々の水に関する基本的な認識をよく表していると思える。

絵の右上には氷河を抱いた山（＝カングリ）があり、そこから水が流れ出し、下流の村の耕地を潤している。カングリー水ー耕地・集落というパターンは、ラダック地方の農村に共通した構図である。

2-1-1. 集落立地とカングリ（雪山）

レー周辺の地形を概説すると、北西～西方向に流れるインダス川に、両岸から多くの支流が流れ込んでいる。それらの支流は、インダス川の低地（レー周辺では幅 2～3 km）に向かって扇状地を形成している。また支流の上流にカングリ（氷河を持つ雪山）があると、河川が通年で涵養される場合が多く、下流の扇状地上部には比較的大きな集落が形成されている。

インダス川左岸では、ストックやその東隣のマトという二つの大きな集落は、扇頂付近に広がり、上流にカングリを持っている。川の集水域も広い（写真 17）。

インダス川右岸のレーの町は、上流にカングリはないが、谷の流域面積が大きいことや小さな氷河があるため、川の水量が保たれているようだ。

2-1-2. 水 オアシス灌漑農業

写真 18 は、ストック村の家と耕地のほぼ全景である。写真の右手前が、ストック川の上流、写真中央の耕地と家がある部分（すなわちストック村の中心部）が扇状地の上部、奥の山地の手前で左右に広がる緑の帯が、インダス川両岸の耕地と村である。

周辺の山地に森林は存在しない。一方、ストック村は、緑の耕地と林地から構成されている。これらはストック川の水で灌漑される。水路の取水口は集落の上流部にある。写真 19 では、左から降りてきている二つの尾根の内、手前側の尾根が川に接するあたりになる。主要な水路は左岸右岸ともに 4～5 本あり、それが枝分かれして、村の隅々の耕地まで行き渡る。耕地の外縁部分に水路が流れ、その外側に耕地は存在しない。

ストック村内の水事情について、ニャムシャンでの聞き取りを以下に紹介する。

水路は共同管理で、水路浚えなどの共同作業がある。取水口は石を積んだだけの簡単なものだが、メンテナンスがそれほど大変ではないらしい。

水路の水は現在では灌漑用が中心である。近年の井戸の普及により、水需要は以前に比べれば逼迫していない。しかし現在でも各戸の耕地への水配分は、水利共同体内の長などが決定し、家々に触れて回る役があるそうだ。かつて発生していた「水泥棒」や「水ゲンカ」は減少している。

上水用に2010年くらいから井戸が普及してきた。しかし村の中でも上流の家は、現在でも用水を上水として使うことは少なくない。一方、下流では以前から井戸を掘る場合も多かった。また、冬季は用水が凍ってしまうため、取水をやめ、凍結した川の表面に穴を開けて水を汲んだという。水路の近くに家畜の糞が落ちていても「七歩離れば、きれい」という言い方があったそうだ。日本の「三尺流れれば清流」を思わせる希釈原理である。

観光客や登山客は、ほぼ水のペットボトルを購入して利用している。

2-1-3. 草原と林野

ストック・カングリという山は、毎年多くの観光客や登山者を迎える。

その際に、登山などのガイドは、ストック村以外の人間でも勤められる。例えば、私の登山に随行してくれたガイドは、ザンスカール（ラダックの南に隣接する山岳地帯）出身であった。しかし、馬方はストック村の人間に限定されている。馬やロバは、登山客のテントや食料などの荷物を運ぶために使われるが、馬の食べる草はストック村のコモンズだからである（写真21）。仮に村人以外がストック村で馬方をつとめるなら、飼料をすべて持参しなければならないが、実質的にそれは不可能である。

上流山間地は、村周辺にくらべて草原が多くなる。地形性の降水のおかげであろう。ストック・カングリBC周辺などが、ストック村の共有放牧地になっており、夏期には役畜ゾ（ヤクとウシの交雑種）やBC滞在中の登山隊の馬などが放牧されている。

写真23は、トントン・ラの下のストック川河床に広がるヤナギ林で「チャンマー」と呼ばれる。村から上流に向かって乾燥した山の中を歩いて行くと、いやおうなく目にとまる森である。このチャンマーの木々は、山の中で（つまり家畜の放牧などに従事するとき）のみ燃料として使うことができる。資源維持のために、村に持ち帰ってはいけない、というルールがある。この禁忌を犯したことによって起こったと言われるできごとが、村には伝承されているという。

3. 開発に伴う農村地域の変化 商品作物の導入と土地の占有

「気がつけば、突然、世界的な貨幣経済の一部として、生活必需品にいたるまで遠方からの力が支配するシステムにラダックの人々は依存していた。ラダックの人の存在さえ知らない人たちの下す決定が、彼らに影響をおよぼすようになっている。もしドルが変動すると、やがてインド・ルピーに影響する。これは、生きていくためにお金が必要になったラダックの人びとが、国際金融市場のエリートに支配下に置かれているということである。土地に頼っていたころは、自分たち自身が支配者であった。」(ノバーク=ホッジ, 2009)

1974年、インド政府は観光目的のためにラダック地域を開放した。以降、小チベットとも言われたラダックの生活の変化は急激かつ根本的なものであった。ノバーク=ホッジ(2009)や山田孝子(2009)に、その経緯は詳しい。そして地域の変容は、日々進行している。この章では主に、現地で観察される、商品経済の浸透に伴った土地利用景観の変化について、報告する。

3-1. ラダックのポプラ林とヤナギ林、及びヤナギの台伐り萌芽

ラダック地方には、河床(河畔)以外には自然の森林はほぼない。オアシス集落内の林は、灌漑用水(あるいはその漏れ水)によって成立しているため、有用樹が多い。

写真24の後ろの細く背の高い木々はポプラ、手前はヤナギである。いずれも建築材となる。ヤナギは台伐り萌芽更新³が行われているため、特異な形状をしている。

写真25は、台伐り萌芽更新のヤナギを少し近くで見たもの。集落や宿泊施設近くなど、建築材の需要のある場所で、多く見られる樹形である。

ポプラは挿し木で増やすことができる。集落内では、家畜の食害を防ぐ為に、若い林が鉄条網で囲まれているのも目にする。

近年は、ムギ畑を転作して、ポプラやヤナギを植林する人もいるという。総じて、農村地域において、商品となるポプラ林やヤナギ林は増加している。後述する通り、建築ラッシュに伴い(写真26)、建築材の需要は高い。一方、自給用のムギ類の耕地が減少していると思われる。

3-2. 農村地域の建築物増加

近年、農村地域においても生じている建築ラッシュに伴う景観の一端を紹介する。

この地方の伝統的な建築物は、日干しレンガで壁を積み、その上に平屋根をつくる(写真1,4など)。構造材としてポプラを使い、その上に細いヤナギを敷き詰め、ヤグズィスト

いうごく普通に見られるシソ科の草を屋根の上に載せ、土を盛って固めている。

レンガは重要な建築資材であり、その原料は表土である。レンガのために庭や畑を掘り起こして、レンガを作っている風景をよく見る（写真 27）。建物（ゲスト・ハウスや蔬菜栽培ビニールハウスなど）の新築目的の場合が多いようだ。

家屋内に注目すると、古い民家は煤が着いて黒光りしているが（写真 28）、新築の家は白々としている（写真 29）。これは「燃料革命」によるもので、かつては乾燥させたヤクなど家畜の糞を燃料として利用していたが、この 10 年くらいでプロパンガスが普及して、暖房や調理に使われるようになったためである。

3-3. 土地の占有、あるいは私権の拡大

ストック村では、多くの畑がレンガ積みの壁で囲まれている（写真 20, 27）。2015 年ストック村を訪れた際、非常に印象的な景観であった。はじめ有畜農業特有の、家畜による食害を防ぐための壁だと思った。

ところが、レンガの壁はこの数年で急増したのだという。ニヤムシヤンの池田さんがこの地に嫁いだ時（2010 年頃）には、壁はなかったという。以前は他人の畑の中を歩いて楽に村の中を行来できたが、今は見通しも悪くなり、通るのも難しい。かつては、他人の家畜が自分の畑に入り込んでしまった時など、それらを留め置いて、所有者に謝罪を求めることもあったそうだ。なぜレンガの壁が増えたのか、よく分からないと、ストック村生まれのワンボさんは言う。この背景には、土地に対する私権の拡大があるように思える。

レーの周辺地域で、利用価値の全くないような乾燥した荒野（扇状地の扇央など）に、石を並べた囲いが増えている。

例えば、ストック村の下流からインダス川にかけての扇状地面には、石の囲いが延々と伸びている（写真 30）。一部政府による測量が行われた場所もあると聞く。これらの土地は、元来は村の共有地、あるいは無主の土地であったと推測される。

新設されたというラダックのユニバーシティは、砂漠の扇状地面にポツンと建っている。大学の周りには少し林がある（写真 31）。他にも、インダス川の近くの低地から山地を見渡すと、扇頂部にのみ小さい林がある扇状地が複数ある。そういう場所は、本来定住は難しいが、近年に何らかの開発目的のために人が木を植えて小さな林を作っている、ラダックの人たちは言う。少なくともポプラやヤナギは自然散布では増えないそうだ。

グーグルアースでも、石の囲いははっきり確認できる。特にストック扇状地に石積みが目立つのは、ラダック地方の中心地レーに近接するからであろう。

また、ザンスカール川近くの、車道に通じていない河岸段丘面でも、石積みの囲いを見た（写真 32）。橋が架けられて道路が延長されれば、いずれはここで商売ができるかもしれ

れない。そのために、近くの集落（スキュ）の人々が、自分の土地として権利を主張するために、石で境界線を作ったのだそうだ。

観光客の増加によって地域開発が進めば、今後<人一人が占有する土地>が増えていく可能性が高いだろう。

おわりに

■開発の中で

レーの町で、プライマリースクールからわらわらと下校する子どもたちの姿をぼんやり見ていたら、彼らの多くが何かを手を持って食べているのに気づいた。それがアイスクャンディーだと知ったときの最初の驚きは、すぐ了解感に変わった。

インダス川とザンスカール川合流点の少し下流に、ダム水力発電所が建設され、レーの町や周辺の村への電力の安定供給が可能になっている。村でも冷蔵庫など電化製品が普及し始めている。私もニャムシャンで冷えたビールを飲んだのだった。

途上地域における西洋式公教育の推進と電源開発は、政府の重要政策である。この地で学校帰り子どもがアイスを食べている、不思議ではない。



レーのメインストリートで野菜を売る近郊の農民

至るところで建築と道路の工事が行われている。レーの町は、二年前に工事中だったメインストリートが完成し、しゃれた観光都市に近づいている。しかし町外れは常にほこりっぽく、車のクラクションがけたたましい。そしてインド人労働者が多い。

「私がレーに来たころ（1970年代後半：引用者注）は、レーは綺麗な町であった。舗装された道路は二本しかなく、エンジンの付いた乗りものは滅多に見なかった。渋滞の原因は牛ぐらいであった。空気は澄み切っていた。（中略）人びとはみんなお互いに知っていて、挨拶を交わし合っていた。」（ノーバグ＝ホッジ）

1970～80年代のラダックを知るノーバグ＝ホッジや山田（2009）の嘆きには、あこがれさえ抱く。そんな素晴らしい時代を知っているのがうらやましい。現代の旅行者は地域の変容を嘆くことさえできない。日本の古き良き時代を『逝きし世の面影』（渡辺京二）を通して知り、そんな日本人がいたのか驚くのと同じである。

それでも、現在のラダックの短い旅の中から、ノーバグ＝ホッジが言うカウンター・

ディベロップメントの必要を感じる。ラダックの人々が、自尊心を持って主体的に振る舞い、十分な情報に基づいて生活の多くの部分を自己決定できる社会が構想されなければならないと思う。

■ストック・カングリというコモンズ

私が今回登ったストック・カングリは、易しい6000m峰として有名であり（だから私も登れた）、世界中から登山者を集めている。登山界の重鎮などが、俗化した商業登山の対象であることを揶揄した文章も見かけるほどだ。確かにカングリBCの環境を体験すると、うなずけなくもない。

しかし、ニャムシャンのオーナー池田さんは憤っていた。
<偉い人に、そういう発言をして欲しくない。現在、どれほどの人が、ストック・カングリのおかげで生活できているのか、知っているのか>、と。



ストック・カングリは、水源の山である。加えて、近年は観光資源の性格も大きく、登山シーズン（6～9月）には、地元で1000人単位の雇用（ガイド、馬追など）を生み出し続けていることを、観光客や登山者は考える必要があるだろう⁴。

¹ 日本滞在経験のあるスタンジ・ワンボさんと池田悦子さんの夫婦が、ワンボさんの実家（屋号ニャムシャン）を中心に営業活動している。

² その経緯は、ヘレナ・ノーバーク＝ホッジ『懐かしい未来 ラダックから学ぶ』により広く知られるようになった。

³ 台伐り萌芽更新（pollard）は、地上のやや高いところで伐採を行い、発生した萌芽を利用する方法。日本においては、東北地方のブナ林の「あがりこ」が知られる。

⁴ 登山やトレッキングは、基本的に夏季中心であり、仕事もその時期に集中する。ラダックの冬季は非常に寒く、観光客は少ない。チャダル（氷結したザンスカール川を歩くかつての交通路）のトレッキングやユキヒョウ・ツアーなどもあるが、集客スケールは小さい。そのため、特に登山などのガイドの専業で、通年食べていくのは難しい。だから農村地域からの出稼ぎで、夏のみレーの周辺で下宿してガイドをし、冬は自分の村に帰る人びとがいる。

また、私に同行してくれたガイドは、高所用の登山靴やアイゼンをストック・カングリBCでレンタルしていた。ガイドの多くが同じスカルパ製プラスチック・ブーツを履いていたのを見ると、彼らはあまり自分の道具を持っていないようだ。ガイドが技量向上する機会は限られるのが現状である。

参考文献

- 五百澤智也『山と氷河の図譜』2007、ナカニシヤ出版
上田洋平『絵画制作を通じた地域生活誌の創発 一心象図法による実践とその展開—』2014
滋賀大学環境総合研究センター研究年報 Vol. 11 No. 1
太田威『ブナ林に生きる 山人の四季』1994 平凡社、
木村理子『ラダックのニンマ派寺院タクトク寺のチャムの儀礼研究』2012 演劇研究室
室田武編著『グローバル時代のローカルコモンズ』2009、ミネルヴァ書房
柳瀬滋郎『インドヒマラヤのチベット世界』2001 明石書店
山田孝子『ラダック 西チベットにおける病と治療の民族誌』2009 京都大学出版会
山本高樹『ラダック ザンスカール トラベルガイド』2012 ダイヤモンド社
山本高樹『ラダックの風息』〔新装版〕2016 雷鳥社
ヘレナ・ノーバーク＝ホッジ（『懐かしい未来』翻訳委員会訳）『懐かしい未来 ラダックから学ぶ』2011 懐かしい未来の本
日本山岳会東海支部『インド・ヒマラヤ』2015 ナカニシヤ出版
Chaudhry, Depi "Trekking Guide to the Western Himalayas" 2009, Collins
Pfister, Otto "Birds & Mammals of Ladakh" 2004, Oxford University Press

謝辞

ストック村ニヤムシャンのスタンジ・ワンボさん池田悦子さん夫妻には、ラダックやストック村のことをたくさん教えていただきました。感謝申し上げます。

写真と図

全て亀岡が撮影・作成。撮影は、特に記載が無ければ 2017 年 8 月、一部 2015 年 10 月。



写真1 レーの町 (2015年10月)



写真2 レーのメインバザール



写真3 タクトク村のチャム (仮面舞踏)



写真4 ストック村ニャムジャン (ステイ先)



写真5 塩をなめるブルーシープ



写真6 トントン・ラ (峠) のギャポ (精霊)



写真7 ヒゲワシの飛翔
(マンカルモ BC にて)



写真8 マシコの仲間
(マンカルモ BC にて)



写真9 ストック・カングリへの道



写真10 警戒姿勢のマーモット
(ストック・カングリ BC にて)



図11 条線土(左)と亀甲土(右)

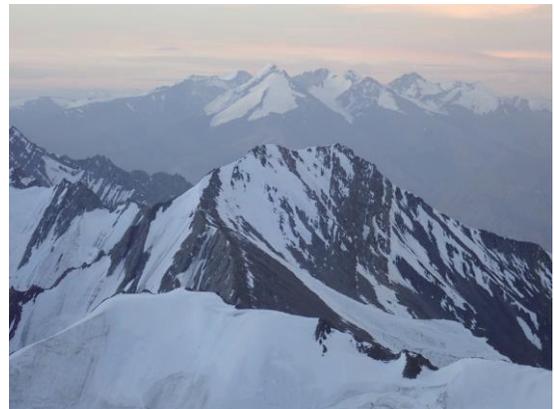


写真12 ストック・カングリ山頂よりカンヤツェを望む。南南西方向。



写真 13 ストック・カングリ 写真中央にある丘が氷河末端のモレーン。氷河は左の斜面に隠れて、ここからは見えない。山頂左のスカイラインが南陵。



写真 14 BC の食事テント 左からコックのスタンジン、ガイドのジャンベルとロトス。



写真 15 BC の撤収



写真 16 (左)

ホームステイ先の娘さん (9 歳) が描いたラダック地方の村の絵。右上には氷河を抱いた山 (= カングリ) があり、そこから水が流れ出し、下流の村の耕地を潤している。



写真 17 インダス川対岸のレーの町から見たストック村の耕地（緑）とストック・カングリ（右）



写真 18 スtock村全景。村の西側の山地の上から見る。右手前が、ストック川の上流、写真中央の耕地と家がある部分（すなわちストック村の中心部）が扇状地の上部、奥の山地の手前で左右に広がる緑の帯が、インダス川両岸の耕地と村である。



写真 19 (上) ストック川右岸の水路。村の上流部。
(2015年10月)



写真 20 (右) ストック集落の中の水路。畑や屋敷はレンガ積みの壁で区切られるようになった。



写真 21 ストック・カングリ BC 付近の草原にて、放牧される登山隊の馬たち。奥の山の下方に氷河があるが、その手前のモレーン（砂の丘）に隠れて見えない。



写真 22 ストック村の馬方さん。カングリ BC の店じまいで、荷下ろし中。2015年10月



写真 23 チャンマー。ストック川上流部河床のヤナギ林。



写真 24 ヤナギ林とポプラ林
(2015年10月)



写真 25 ヤナギの台伐り萌芽更新（あがりこ）
(2015年10月)



写真 26 ストック村で新築中の土地。左にレンガが積まれている。用材はポプラである。



写真 27 ニヤムジャンの庭にある日干しレンガ。増築に利用予定。



写真 28 古い民家。(2015年10月)



写真 29 新築の民家の天井。梁はポプラ、天井はヤナギ。(2015年10月)



写真 30 ストック下の石積みによる囲い



写真 31 (左)
ストックのユニバーシティ



写真 32 ザンスカール川下流の石積みの囲い (2015年10月)



ストック谷 景観絵図

亀岡岳志作成

Special thanks to
ニヤムシャンの皆さん
田中拓也さん
亀岡太郎さん

ストック・カングリ
南陵 6150m

ゴレップ・カングリ

カングリBC
5000m

チョルテンチャン

マンガルモBC
4350m

ルンバック〜
ジンチェン

ストック・ラ



ヒゲワシ

河床の
ヤナギ林

チャンマー

砂岩泥岩五層

ストック・ラ

鼠張り塚

(ラダック王国時代)

ストック川

複数の水路

ヤルツェ

水流あり

3650m
ニヤムシャン

ストック村

ストック王宮

かつてのラダック王国時代の
王の末裔が住む。現在、王は
地主になり、王宮は博物館と
して、一部が公開されている。

扇状地

マト

上流

石積み
土地の囲い込み

段丘崖

北

チョグラムサルレー
ラダック中心都市方面

インダス川
下流

3200m